

東日本支部だより

2006年3月1日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

定例研究会のお知らせ

◆東日本支部第 24 回定例研究会

時 2006 年3月 18 日(土)午後1時 30 分～4時 30 分

所 東京芸術大学音楽学部 5-301 教室

(JR上野公園口または地下鉄千代田線根津駅下車)

○2005 年度 卒業論文発表(その1)

1. 重田 絵美(東京芸術大学)

近代日本の子どもの歌における替え歌

—言語の置き換えに伴う音楽の変容—

2. 柴田 真希(東京芸術大学)

黒川能が現代において持つ意味

—王祇祭を中心に—

3. 大石 あゆ美(東京学芸大学)

音楽教育における伝統観に関する一考察

—沖縄の音楽・芸能を通して—

4. 清水 宏美(東京学芸大学)

中学校における「日本の音楽」の指導

—「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」を踏まえて—

5. 手島 育(新潟大学)

聖籠町浜地区集落 高齢者の歌唱行動とその意味

6. 青柳 万紀子(東京芸術大学)

翻案歌舞伎のテキスト研究—『西国立志編』(第三編)を原典とする二つの作品をめぐって—

司会 加藤 富美子(東京学芸大学)

○2005 年度 修士論文発表(その1)

1. 岡田 恵美(東京芸術大学)

ヒンドウスターニー古典音楽におけるラサのメカニズム

2. サワン・ジョシ(東京芸術大学)

1951 年以降のネパールにおけるヒンドウスターニー
音楽の導入と受容

◆東日本支部第 25 回定例研究会

時 2006 年4月 1 日(土)午後1時 30 分～5時

所 お茶の水女子大学 共通講義棟2号館 102 教室

(地下鉄丸ノ内線 茗荷谷駅下車 徒歩7分)

(ご来校の際は身分証明書をお持ちの上、正門をご利用ください)

○2005 年度 卒業論文発表(その2)

1. 河内 暁子(東京芸術大学)

高千穂の夜神楽についての一考察

—地域内における統合・個別化傾向—

2. 原納 愛(東京芸術大学)

日本音楽の五線譜化にみる楽譜の意味

—声明を中心に—

3. 山下 正美(お茶の水女子大学)

日本における鉄製口琴についての研究

4. 橘川 友里(お茶の水女子大学)

図像資料に見る歌舞伎音楽

—天明・寛政・文化期の出語り図を中心に—

5. 栗原 千絵(国立音楽大学)

アイルランド移民の歌

—ジョン・モールデンの歌集を補足しながら—

6. 鈴木 亜紗子(東京芸術大学)

スウェーデンの民俗音楽とその環境の変化

7. 豊田 祐子(国立音楽大学)

1970 年代以降の日本における中国音楽の受容

○2005 年度 修士論文発表(その2)

1. 中村 麻衣子(東京芸術大学)

近代雅楽史の研究

—神社祭祀における雅楽の普及とその周辺—

2. 金 志善(東京芸術大学)

植民地時代に日本の音楽学校に留学した朝鮮人

司会 野川 美穂子(東京芸術大学)

定例研究会の報告

◆東日本支部第 22 回定例研究会

時 2005 年 12 月 3 日(土)午後 1 時 30 分～4 時 30 分

所 お茶の水女子大学 人間文化研究科棟 4 階 405 講義室

●研究発表と対談

「アジアの芸能とジェンダー」

1. インドの芸能における民主化とジェンダー

—デーヴァダーシー問題とナーガトナーンマールの
貢献—

井上貴子(大東文化大学)

(発表要旨)

20 世紀前半、インドの芸能の変容を語る際に用いられるようになった「民主化 democratization」という言葉は、性別、カースト、宗教、民族などを問わず、誰にでも芸能の担い手またはパトロンになる道が開かれ、誰もが芸能の上演に担い手や観客、パトロンとして参加できるようになることを意味する。このような現象は、一般に西洋近代との接触とその価値の受容によって引き起こされるかのように語られがちである。しかし、西洋的価値が女性の活動を制限し、土着の価値が「民主化」現象を引き起こす場合もある。主に婚姻儀礼を介して神に奉納され、ヒンドゥー寺院の儀礼や祭礼、宮廷の宴席、結婚式などの縁起のよい席で主に歌と舞踊を担ってきたデーヴァダーシー(字義的には神に仕える女性)は、人間の男性と正式に婚姻せずに性交渉をもつため娼婦として非難の対象となり、19 世紀末ごろから、女性の地位向上をめざす社会改革運動家によって、激しいデーヴァダーシー制

度廃止運動が展開された。当時の著名デーヴァダーシーであったナーガトナン・マール(1878-1952)は、マドラス・デーヴァダーシー協会の書記として、デーヴァダーシー制度擁護の立場をとり、自らを文字通り「神にすべてを捧げた女性」として理想のデーヴァダーシー像を追及するなかで、18世紀タンジャーヴール・マラーター宮廷付デーヴァダーシー、ムドゥパニによるテルグ語抒情詩『ラーディカーの慰撫 *Rādhikā-sāntvanamu*』を校訂出版し、楽聖ティヤーガラージャの埋葬地に寺院を建立し、生涯を楽聖の作品の普及につとめた。当初、楽聖の命日に開催される音楽祭に女性の参加は認められていなかったが、彼女は誰もが参加可能な音楽祭を開始、今日の「民主化」された音楽祭は彼女の介入によって実現したのである。彼女は、「永遠の法 *Sanātana-dharma*」の集会やサンスクリット文学関係会議に出席する、むしろ厳格かつ保守的なヒンドゥーであった。彼女の行動はバクティ *bhakti*(神への献身)の理想像を追求した結果であり、民主化は「西洋近代」の必然的現象とはいえないことを示している。逆に、デーヴァダーシー問題の発生にみられるように、女性運動を指導したインドの女性知識人が性差別を助長した側面もあることを忘れてはならない。

2. 女流義太夫の「正統化」とジェンダー

—日本の近代化と伝統芸能保護政策の間で—

中村美亜(東京芸術大学)

(発表要旨)

近年、日本音楽研究において、女流義太夫が取り上げられることが増えてきた。本論は、筆者自身の行った女流義太夫の調査を、キミ・コールドレイクや水野悠子らによる、そうし

た最近の歴史研究の成果に照らし合わせながら、女流義太夫の評価が行われてきた文化的・イデオロギイ的枠組みに関する考察を行う。特に、「正統性」が付与される過程に着目することで、現在の女流義太夫のあり方が、日本における西洋的近代化とナショナリズム、そして、それらと複雑に絡み合うジェンダーの問題と不可分であることを指摘する。

女性の義太夫は、男性の「義太夫」に対して、「女流」という語により差異化される。二百年にも及ぶ長い歴史にもかかわらず、女流義太夫は、未だ文楽の舞台にのぼることが許されていない。「芝居は男のものだから」という彼女たちの口振りは、男性義太夫の特権的地位を受け入れ、彼らとは別の道を歩むことを目指しているかのようにも聞こえる。しかし、このことから、彼女たちが男女の不平等に対して無関心だと判断するのは、あまりにも早計である。女流義太夫は、「正統性」の獲得を通じて、自分たちの地位を向上させていこうと、むしろ、聡明に振る舞っているのである。

日本の伝統芸能において、正統であるか否かは死活問題である。義太夫として活動していくために、女流義太夫は、権威ある男性義太夫や、伝統芸能の保護政策を担う日本政府から「正統性」を与えられなければならない。しかし、ここで注目すべきなのは、この正統化のプロセスに、西洋的近代化の模倣と、その反動としての伝統的日本への固執が混在して現れることである。つまり、正統化には、大衆芸能から、より洗練された芸術へという女流義太夫の変質が要求される一方、伝統芸能保護というナショナリスティックな政策の中で、女流義太夫は、伝統的なジェンダー観を受け入れることが余儀なくされるのである。

(コメント・中村美奈子)

最初にお断りしておくが、私はジェンダー論の分野の専

門家ではない。東洋音楽学会の東日本支部では、この分野の専門家が今回のお二人のほかに思いつかなかったことから、主催者である私のほうで記録を引き受けることになったことをご了承いただきたい。

今回のお二人の発表者の共通項は、いずれも同じアジア人女性という立場からアジア人女性のジェンダー問題について論じ、また、近代化(民主化)および正統化への対処という観点から、女性演奏家の活動について論じるという点であったように思う。

井上氏の発表は、デーヴァダーシー問題と、アーラーダナーというヒンドゥーの儀礼にナーガラトナンマールが果たした役割についてであった。ナーガラトナンマールは、正統かつ厳格なヒンドゥーを思想的背景にもつ宮廷音楽舞踊家で人気歌手として音楽会を行う女性知識人であるが、女性の参加が許されていなかったアーラーダナーの儀礼を誰でも自由に参加できる(男女同数が参加する)儀礼へと改革した。しかし、これは、西洋近代の必然的現象としての民主化ではなく、彼女のバクティ(神への献身)の理想像を追及した結果であったということである。つまり、人間として男性と同じ原理を求めることと、神の前での男女平等は異なるということが示された。

中村氏の発表は、1989年に女流義太夫の師匠の弟子となり義太夫協会の会員となっている太田暁子氏へのインタビュー等を通して、女流義太夫の現状からジェンダー問題を論じるものであった。政府によって男性による文楽形式が正統として成文化され認知された一方で、女性義太夫は、男性の権威によって正統化されなければならず、彼女らの「正統性」を自身で確立する可能性を摘み取られてしまった状況にある。

質疑では、古典の正統化にジェンダー要素はどの程度絡んでいるのかという質問が出たが、インドではカースト制度

の問題など、他の要因も複雑に絡んでおり、ジェンダーだけでは論じられないというのが、この分野の研究の難しさであろう。日本やアジアの芸能におけるジェンダー問題を考える際に、欧米のフェミニスト理論をどのように用いるか、また、「アジアのフェミニスト理論」をどのように構築していくかということが今後の課題であるように思われた。

定例研究会発表募集

東日本支部では会員の皆様による活発な研究活動のため定例研究会での研究発表等を募集しております。発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、締切期日までに東日本支部事務局までお申し込みください。

◇第27回定例研究会

2006年7月1日(土) (発表希望締切 3月末日)

発行: (社)東洋音楽学会東日本支部

編集: 遠藤 徹、小塩さとみ、加藤富美子、

大木聡美、黒川真理恵

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 音楽・演劇講座 加藤(富)研究室気付

Tel/Fax:042-329-7576

E-mail: katomi@kf6.so-net.ne.jp(加藤)
